

パラグアイの教育事情及び児童の実態について

前アスンシオン日本人学校 教諭

新潟県新発田市立七葉小学校 教諭 角 直 浩

キーワード：パラグアイの教育事情、算数教育、パラグアイの児童の算数に対する意識調査と自尊感情

1. はじめに

南米パラグアイの首都に位置するアスンシオン日本人学校での3年間、現地教育理解の調査研究のため、現地の国立校、私立校へ積極的に赴き、主に算数の授業参観や、各種アンケートの実施、分析により、パラグアイの教育の実態を把握するように努めてきた。視察した学校は7校で、その内訳として国立校4校（アスンシオン市近郊2校、アトゥラ市2校）、私立校3校（ニホンガッコウ、カンポバルデ、パンアメリカンスクール）である。首都圏の国立学校、地方の国立学校、施設設備等が充実している首都圏の私立校と、それぞれ違う環境の学校を視察することで、パラグアイの全体的な教育の実態を垣間見ることができた。

パラグアイの教育環境は、南米の中でもそのレベルは低く問題点が多くある。教育予算の低さや教員の質、学校数の不足、校舎等の倒壊、貧困などによる就学率の低下などが挙げられる。しかし、学校で学ぶ児童はとてとてもポジティブであり、学校での生活を楽しんでいる様子が、実際に視察した際に交流した児童の姿やアンケート等からうかがえた。

このレポートでは、パラグアイの教育事情、算数教育の実態、学校で学ぶ児童の様子などについての調査研究を通して考察していく。

2. パラグアイの教育制度

(1) 就学前教育 1年間

(2) 初等教育 9年間（義務教育）

※3期に分かれている。1期：1年生～3年生 2期：4年生～6年生 3期：7年生～9年生

(3) 中等教育 3年間

(4) 高等教育 4～6年間

（日本国外務省HPより http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/04latinamerica/infoC42500.html）

3. パラグアイの教育事情

(1) 教育予算

パラグアイの2015年度の国家予算で、教育予算は対GDP比で4.28%にとどまり南米の主な6か国の中で最低となっている。（アルゼンチン6.63%、ボリビア5.85%、ブラジル5.55%、チリ4.69%、ウルグアイ4.44%）
（<https://www.nodal.am/2017/06/paraguay-pais-menor-gasto-social-la-region-segun-informe-la-cepal/>）

(2) 教員の賃金

パラグアイの小学校教員の平均年間所得は、6,166ドルで、南米諸国の中で最下位に位置する。
（チリ15,305ドル、アルゼンチン10,339ドル、エクアドル9,804ドル、ブラジル8,375ドル、コロンビア7,128ドル、ペルー6,761ドル）

（<https://www.5dias.com.py/paraguay-entre-los-que-menos-paga-a-maestros/>）（Paraguay Business News No.80）

4. 算数教育のカリキュラム

算数は、1週間に5回で、1回を40分とし、週に200分行うことになっている。これは、全体の16.67%である。算数は他教科に比べ週時数が多く、母語（スペイン語）と並んで重要な教科となっていることがうかがえる。

首都アスンシオンから50kmほど離れた地方都市アトゥラ市にある国立校「Escuela Basica No.387」での6年生の時間割では、週に29コマあり、算数（Matematica）は、スペイン語（Castellano）、グアラニー語（Guarani）とともに毎日行われている。

5. 算数授業の様子

(1) 国立学校の授業の様子

国立学校の場合、授業担当教師が黒板に問題等を書き、それをノートに書き写しながら授業を進めていくというスタイルが一般的である。日本で良く活用されている「計算ドリル」などの問題集は、児童家庭の貧困等の原因で用意ができないのが現状である。また、教育予算の関係でコピー機や印刷機が学校に備わっていないこともあり、教師が問題を板書するしかないわけである。教科書は無償で配布されているが、掲載されている問題数が少ないという問題点もあるようだ。

児童の机は、椅子と一体型が一般的で狭い。したがって、ノートを置くのが精いっぱいである。また、教室には児童用のロッカーがないため、児童の机の周りにカバン等を置くようになっている。



国立小学校での算数授業の様子

(2) 私立学校の授業の様子

私立の学校は、国立学校とは違い授業料の徴収があり設備等も比較的充実している。また、児童の手元にはテキストがあり、国立学校との教育環境の格差がうかがえる。

(3) パラグアイにおける算数教育に対する考察

国立学校の視察を通して感じられたことは、まず、授業がほとんど「講義形式」であり、児童が思考する場面が少ないということである。一般的に日本で行われているような、課題に対して考えを巡らせながら意見を出し合い、解決方法を見出していくという授業はほとんど見ることはできなかった。また、その学年の單元ごとに身に付けさせなければならない学力が定着されないまま授業が進んでいるという実態である。このような課題の根底には、授業日数に対して、教えなければならない内容の量が多いという問題があると考えられる。逆に言えば、授業時数が足りないということになる。教師は、2月から11月までの約9か月の間に、その学年の内容を終わらせなければならない。年間の授業日数は、単純計算で約180日間だが、天候によって授業ができなかったり、学校行事などで授業が削られてしまったりすることが大いにある。そうすると、時間的な余裕がなくなり児童の学力の定着よりも、まずは「終わらせる」ことを優先してしまっているのではないかと想像する。じっくりと考え、話し合いをしながら解決方法を見出していくような授業ができない理由がここにあると考える。

パラグアイの児童の学力の向上を考えると、授業日数、教科の授業時数をしっかりと確保するような手立てが求められる。

6. 算数に対する意識調査

パラグアイの算数教育についての課題が浮き彫りになったが、このような実態の中、児童は算数に対してどのような意識をもっているのか、ということに関心をもつようになった。そこで、以下のようなアンケートを、都

市部の私立校、地方の国立校に実施してみた。アンケートの項目は次のとおり。

- ①あなたは、算数が好きですか。②なぜ、そう思いますか。③算数は、将来役に立つと思いますか。
- ④どんなときに役に立ちますか。 (アンケート結果の数値、グラフ等は割愛する。)

○考察

都市部の私立学校の6年生も地方の国立学校の6年生も、総じて算数を「好き」と感じていることが分かった。私立学校では93%、国立学校では、実に全員が好きという結果には驚いた。日本の小学校6年生に同じアンケートを取った場合、想像でしかないのだがこれまでの経験から、これだけの高い数値は出ないだろうと考える。学力的には高くないという実態から、「算数嫌い」がもっといるのではないかと思ったのだが、この結果を見て、パラグアイの独特の「文化」があるのだろうと思わざるを得ない。日本の児童が算数嫌いになる原因のひとつは、「わからないから」「難しいから」という理由である。パラグアイの児童の中にも「わからない」「難しい」と思う児童は多いだろう。しかし嫌いにはならないのはなぜか。別の角度からの分析も必要になると考える。

将来役に立つか、という質問に対して、「役に立つ」「時々役に立つ」を合わせた数字を見ると、ほぼ全員が「役に立つ」と考えている。算数が自分の将来や生活に密接に関係しているのだろう。私立学校のアンケートを見ると、「将来の職業や進学のために役に立つ」と回答している子が多い。6年生のこの段階においてしっかりと人生設計ができていることがうかがえる。また、「外国為替の計算」という回答があったことに、隣国と接している国ならではの回答だと感じた。日本の6年生からは出てこない回答だろう。また、国立学校の児童の回答を見ると、地方の国立学校の児童らしく、役に立つ場面は「買い物」となっている。やはり、算数が生活に密着していることがうかがえる。日本の児童は、算数を生活に密着させて考えているのかどうか、というのは、算数科の課題でもある。どの単元においても、どんな場面でこの学習が生かされるのか、ということを考えさせる必要があることは、以前から指摘されていることだ。その点において、算数が生活と密接に関係しているパラグアイの児童の考え方や感性を私たちは見習うべきであると感ずる。

7. パラグアイの児童の自尊感情

アスンシオン日本人学校では、生徒指導の一環として児童生徒の自尊感情を測定するために「自尊感情測定尺度（東京都版）自己評価シート」を活用している。

このアンケートを、パラグアイの児童に実施したらどのような結果が得られるのかと思い、アトゥラ市の国立学校の6年生及び都市部の私立学校の6年生に実施した。右の表がその結果である。

自尊感情測定尺度 (東京都版)	4	3	2	1	4	3	2	1
1) 私は今の自分に満足している	97.8	2.2	0.0	0.0	96.1	11.8	0.0	2.0
2) 友人の意見を素直に聞くことができる	91.1	24.4	13.3	11.1	97.8	33.4	5.9	3.9
3) 人と違っていても自分が正しいと思うことは勇気できる	91.1	11.1	8.9	8.9	91.0	25.5	4.8	18.8
4) 私は自分のことが好きだ	88.9	2.2	4.4	4.4	91.1	4.9	1.0	2.9
5) 私は人のために力を尽くしたい	73.3	13.3	4.4	8.9	64.7	22.5	5.9	5.9
6) 自分の中には様々な可能性がある	75.6	15.6	2.2	6.7	82.4	13.7	2.0	2.0
7) 自分は夢をかなえる人間だと思うことがある	20.0	20.0	8.9	91.1	18.8	17.4	9.8	93.9
8) 私は他の人の気持ちになることができる	44.4	20.0	15.6	20.0	47.1	24.1	3.9	9.9
9) 私は自分の判断や行動を信じることができ	82.2	11.1	0.0	6.7	78.1	21.8	2.0	2.9
10) 私は自分という存在を大切に思える	91.1	8.7	0.0	2.2	85.1	10.8	1.0	2.0
11) 私は自分のことも理解してくれる人がある	81.1	8.9	2.2	4.4	86.9	6.9	3.9	3.9
12) 私は自分の意思も他人もよくわかって	88.4	8.9	2.2	4.4	85.9	12.7	2.0	3.0
13) 私は今の自分は好きだ	44.4	2.2	0.0	53.3	34.7	8.0	0.0	50.0
14) 人は必要がからないよっていつも差別しては差別性をもった態度で	98.7	22.2	4.4	6.7	95.9	20.4	4.9	8.9
15) 私は誰にも負けないものがある	42.2	24.4	8.9	24.4	91.0	25.0	3.5	18.8
16) 自分にはよいところがある	66.7	22.2	4.4	6.7	78.4	19.6	2.0	0.0
17) 自分のことを言ってくれる周りの人に感謝している	91.1	2.2	2.2	2.2	96.1	3.9	0.0	0.0
18) 私は自分のことは自分で決めたいと思う	75.6	11.1	6.7	6.7	83.8	28.4	1.0	8.8
19) 自分は誰の味にもなっていないと思う	22.2	4.4	11.1	62.2	7.8	12.7	12.7	96.1
20) 私は自分のことを必要としてくれる人がある	97.8	2.2	0.0	0.0	91.1	7.8	0.0	1.0
21) 私は自分の個性を大事にしたい	95.4	2.2	2.2	0.0	93.1	6.9	0.0	0.0
22) 私は人と同じくらいの特長のある人間である	94.4	9.7	6.7	2.2	88.1	5.9	2.9	5.9

地方の国立校と都市部の私立校と2校の様子を並べて比較しようとしたのだが、結果的には、ほとんど同じ数値であった。したがって、調査対象の人数は少ないものの、パラグアイの児童の内面的な心情は、都市部も地方もほとんど変わらないということが言える。実施前に、日本の児童に比べ自尊感情は高いだろうと予想をしていたが、その予想をはるかに上回る数値に驚かされた。

先に述べた、「算数に対する意識調査」の結果において、算数の学力と算数が好きと答える児童の数のギャップは、この自尊感情の高さなどからも説明できるのではないだろうか。おそらく、勉強ができるかできないかと

いう視点で保護者や周囲から見られるのではなく、常に肯定的な評価を得ているのではないかと考えられる。

日本の児童との比較はしないにしても、日本の児童もこのような明るく前向きな心情をもつ子が多くいてほしいものである。ただ、単純に比較することができないのも事実である。それは、国の情勢、文化や歴史、宗教観などが大きく異なるからである。特に、カトリック信者の多いパラグアイでは、その宗教観から派生している生活環境、家庭環境が大きく影響しているのではないだろうか。また、ラテンアメリカ独特の感性もあるだろう。

8. おわりに

パラグアイの算数教育をテーマに、現地の学校を視察したり、資料を集めて分析をしたりすることで得られたことは多くあった。

パラグアイの初等教育は、世界経済フォーラム（World Economic Forum: WEF）が測定したパラメータにおいて、南米最下位となっている。（Paraguay Business News No.35）また、「教育とともに」財団（Juntos por la Educacion）のR.Cano氏によると、100人が初等教育に入学したとして、そのうちの35人が中等教育を終えることができ、10人が高等教育に進み、最後に1人が高等教育を終える、という現状だそうだ。教育に関する資料を集めてみると、パラグアイの教育は、改善しなければならない部分は多くあると言わざるを得ない。

しかし、算数についてのアンケートや自尊感情のアンケートから察するに、パラグアイの児童はとてもポジティブで未来をしっかりと見据えていることがうかがえる。ということは、教育制度や国による教育に対する様々な援助がもっと改善されれば、将来的にパラグアイのさらなる発展は大いに期待できるのではないだろうか。今後のパラグアイの教育改革に期待したいところである。

最後に、このレポートを作成するにあたり、「Paraguay Business News」編集長の立川巧雪氏、青年海外協力隊の三井久美子氏、田部信宏氏、西野宏明氏には、資料の提供、児童へのアンケートの実施など、多くの場面でご協力をいただいた。心より感謝申し上げたい。



【参考資料】

日本国外務省HP

パラグアイ教育省HP

Paraguay Business News

ULTIMA HORA 紙

abc 紙